

presented by  
箱庭の楽園



鬼畜  
な  
主人様の

異常な  
独占欲



R18



## 「好きだ、お前の体が」 護国寺佐助(ごこくじさすけ)

俺様気質の勘違い男。絶倫。

すずに一目ぼれし

女中として雇い入れる。

傲慢な性格ゆえ素直に好きだと言えずに、奇行に走りがち。

思い込みが激しい残念な性格。

誰にでもできる簡単な仕事と騙してす

ずを闇に引き込みモノにする。

基本、反省はしない。

すずの泣き顔がD性癖。



## すず

ドジばかりしている女中。

不幸体質でいやと言えない。

湯たんぽの代わりに布団を

温めるよう言われ、まんまと

そのまま手籠めにされてしまう。

夜な夜な理不尽な凌辱に耐える不憫な

女の子。貧乳を気にしている。

毎晩変態プレイに付き合わされる。

佐助の友人の前で犯されたショックで

逃亡するがすぐに捕獲される。

感じやすい体質。

鬼畜なご主人様の異常な独占欲

サンプル版

製品版は♡喘ぎありバージョンと♡なしバージョンが選べますが、こちらは♡ありバージョンのサンプルとなっています。

## 一章 壊した壺の代償

「一つお前に頼みたい仕事がある」

「はい。なんでも致します」

「最近朝晩の冷えがきつくなってきたのに、いつも使っている湯たんぽが、割れてしまった。お前に代わりを勤めてほしい」

「ゆ、湯たんぽの代わりですか？」

「それならドジなお前にもできるだろう？ 布団に入り中を温めるだけの簡単な仕事だ。それにお前なら湯を取りかえる必要もないし、湯たんぽより大きいからより温かい」

さすがに衝撃を受ける。いくら仕事ができなくても、湯たんぽの代わりにな

れとは。

もはや人間としての尊厳を全否定された気がする。

啞然としたまま無言でいると、

「いやなのか？ 割れた壺の代金をお前の年季に換算すると十年分だが」

「いえ！ めっそもございません。喜んで湯たんぼの役目を全う致します」

こうなれば、日本で一番優秀な湯たんぼを目指そう。故郷の家族のためにも首になるわけにはいかない。

金にならない矜持など捨て去って、今日から人間湯たんぼだ。

佐助が寝るまでの少しの間布団を温めればいいだけだ。

世間知らずのすずは、こうしてまんまと佐助の罠にハマってしまったのだ。  
った。

二章 人間湯たんぽ、ご主人様に純潔を奪われる

夜になった。

「失礼します」

すずは佐助の寝室の襖を開けた。佐助は文机に座り、帳簿を確認している。

「うむ。先に布団に入っておれ」

「はい」

まだ働いている佐助の横で、先に布団に入るのは気が引けるが、寒がりの

「ご主人様のためだから仕方がない。」

ある程度布団が温まったら、自分の役目は終わるだろうから佐助が寝ると同時に布団から出て、自分の部屋に戻ればいい。

と黙っていたら、昼間の疲れから、ずずはうとうと眠ってしまった。

「ふえっ？」

「起きたか。全く仕事中に寝るとはのんきなお前らしい」

目が覚めると、布団の中で佐助に覆いかぶさっていた。

「あ、そろそろ失礼しますね」

「なにを言っている。朝方一番冷えるのに、今出ていっては、湯たんぽ失格だろう」

「え？」

朝まで一緒に寝ろということか。

「それに、お前少し冷たいな。俺より冷たくては意味がないだろう」

もともと女性のほうが冷えやすいのだから、仕方がないが、責められると湯たんぽとしても半人前かと思ひ悲しくなる。

佐助がずくのひんやりした足を自分の足に挟み、手を頬に当てさせた。全身を密着させ、抱きしめられると確かに温かいが、こんな状況は落ち着かない。

「こうすると少しは温まるだろう」

「でもそれでは、私のせいで旦那様が冷えてしまいます」

「いいや、これから温めてもらっぞ」



そう言つて悪人風の笑みを浮かべ、すずの着物の帯をほどいた。

「さ、寒いです」

「一人ならそうだが、二人なら脱いだほうが温かくなる」

乱れた着物の隙間から、すずの胸をやわやわと揉み、あちこちに接吻した。肌をきつく吸われると、ぴりつとした痛みが走る。

「ひゃ」

「体をこすりあわせると摩擦で体温が上がる」

確かにどんどん全身が熱くなる。佐助もどんどん熱くなってきたのがわかる。

ごつごつした大きな手が、体を這う。

「お前、ちゃんと食っているのか。身体が薄い。こんな小さな乳では、赤子が満足できぬだろう」

「まだ赤子などいけません」

一方的に触られたうえ、気にしている貧乳のことをさくつと言われ、傷ついた。佐助の手が大きいので、余計に自分の胸が小さく思える。

「もっとちゃんと食べろ。俺のために」

さっきまで赤子がなんちゃらと言っていたのに、俺のためとか言い出した。佐助はすずの乳首を口に含んだ。

「ひゃっ、旦那様。なにを」

「体も温まるし、お前の乳首も育つだろう。一石二鳥だ」

「そ、育てる？ あっ、ああん。引っ張らないでえ」

敏感な中心を吸われ、胸の肉を揉まれていると互いの吐息が荒くなる。

「あの、ただ布団を温めるだけって」

「お前が冷たいから悪い」

確かにこうしていると熱が上がる気はするが、なにかおかしい。乳首に吸いつかれていると、下腹が痺れたようにじんじんとしてきた。

「や、あ……♡くすぐったいです」

「慣れたら気持ちよくなる。貧乳も強く吸ってやればそのうち育つだろう」

「ふあ、やあ。お戯れはおやめください」

延々と胸に吸いついて離れない佐助は、中心を転がしたり、軽く齒を立てたり夢中な様子だ。

「んっ、は、いや。部屋に帰りたい」

「今日からお前の部屋はここだ」

「えっ」

驚いていると、唐突に接吻された。

角度を変えて何度も何度も唇が合わさる。

これは愛し合う男女がする行為ではないだろうか。

「あ、あう」

「口を開け」

歯を食いしばっていると、強引に指で口を開かされる。

中に佐助の分厚い舌が入り込んでくる。くちやくちやとすずの口内を舐る佐助に翻弄され、状況がわからなくなる。

「ん！ んーっ！」

これはなんのためにしているのか。舌の根をなぞられたり、舌をきつく吸われたりしているうちに、体に力が入らなくなってきた。

どちらのものかもわからない唾液がすずの口の端から落ちると、それも舌で掬われる。

「お前の口の中は甘いな」

「ふああ。くるし、あ、ん♡」

ようやく離れた佐助の唇が、今度はすずの体を這いまわる。うつぶせにひっくり返され、背中や肩にも痕をつけていく。

どこもかしこも好きにされて、もう考える余裕もない。

すずが逆らって追い出されたら、実家にまで迷惑がかかってしまう。だから黙って耐えるしかない。

——深く考えては駄目。ただ寒いから体温を上げようとしているだけなんだ。きつとそうだ。

すずは昔から理不尽な目に遭うと、現実逃避をする癖があった。自分に起きていることは大した不幸ではないと。

すずがそう決めた瞬間、佐助が思わぬことをした。すずの両足を開いて、そこに顔を埋めたのだ。

「え……な、なにをなさって」

「おなこの体を温めるにはこれが一番だ。もう濡れているからあと少しだ」

佐助の舌が、すずの割れ目をなぞる。ありえない異常な行為に、思わずのけぞる。

狂気だ。狂気の沙汰だ。

——旦那様は仕事のしすぎで、頭がおかしくなってしまったのかもしれない。

「ひっあ、あ、ああ♡♡」

「いい具合に蕩けて、開いている。お前もまんざらではないのだろう」

意味不明なことを言いながら、さつき乳を吸ったように、そこを貪るよう

に吸いついて離れない。

敏感な粘膜をねちっこく舐められ、すずは髪を振り乱して喘いだ。

「そ、そのようなところに口をつけてはいけません」

「いけないことなどなにもない。もともとお前は俺の所有物なのだから」

「ひあ、す、吸わないでえ♡」

「悦いのか、すず」

「こ、怖いです」

「おとなしくしてろ」

いやらしい音を立て、すずの敏感な突起を舌でこねくりまわしたり、吸ったりする。

「ここが膨らんで硬くなっているだろう？ お前が俺を欲している証拠だ」



そんなものは知らない。勝手に好き勝手しておいて、訊かれてもわからない。

体中の血液が秘部に集まったかのように、そこが熱くなる。

——これが旦那様の言ってたこと？

必死に足を閉じ、布団の上に逃げようとするが、そのたびにがっしりと押え込まれて、動きを封じられた。

「あ、♡あぁ♡♡や、もうおやめください」

「駄目だ。まだ早いと待っていてやったら、生意気に男をたらしこみおって」

「な、な、なんのことですか。恥ずかしい」

「なにが恥ずかしいだ。こんなに足を開いて、だらしない顔をしておいて」

昼いじられた時に初めて知った感覚がまた近づいてくる。

「な、なんか変だからおしまいにしてください」

「いきそうなんだろう？」

「あ……あああ♡♡♡」

「いったな？ お前、感じやすいし達しやすいな。もう少し我慢できんのか。たわいなさすぎるぞ」

じゆるじゆる卑猥な音が部屋に響く中、すずは果てた。

佐助の目がいつもより怖い。

いつも恐ろしい存在だが、今日の怖さはいつもとなにかが違つ。飢えた野生動物を思わせる。

「すず。よく聞け。今からすることを他の男にはさせてはならん」

「ふえ？」

あまりの真剣さに、何事かと思う。

開かれた足の間に、熱いものが当てられる。

暗闇の中ではよく見えないが、男根に違いなかった。

幼い弟のそれしか見たことがないすずは仰天した。大きさがまず段違いだ。それに天に向かってそそり立っている。

そんなものを押し当てて一体どうするのか。

すずが恐怖に慄いていると、それは体の中に入ってきた。

「あっ？ ひ、いい」

「少しの辛抱だ」

「あああ……♡」

ゆっくりと粘膜を押し広げながら、確実にすずを犯している。

これは男女の交合ではないのだろうか。少なくとも湯たんぽ相手にそんなことはしないと思う。してたら大変だ。頭がおかしい。

「い、痛い……お許してください」

すずが泣きながら懇願するが、一切躊躇せず、佐助は腰を進めた。

「もうお前は、ずっとここにいるんだ」

すずは恐怖と痛みで泣き出した。

「うっ、ひっく」

「大丈夫だ。毎晩してればいずれ慣れる」

どうやら毎晩するつもりらしい。

「あっ♡うっ、う♡」

「いいぞ、すず。力を抜くんだ」

すずの濡れた顔に頼ずりすると、一度動くのをやめてくれた。さっさと「  
の異常な行為を終わらせてほしい。」

「ふあっ、あの。これ本当に温めるためなんですか」

「そうだ」

「ほ、本当に？」

「男に二言はない」

なんか変だと思いつつ、すずは立場上逆らえなかった。

突き刺さっている楔を抜こうと腰をずらすと、再び抑え込まれ腰を打ち付けられた。

「あ、あ♡奥までいやあ」

「お前の体にしっかり覚えさせないとな」

互いの汗とすずの体液で二人の下半身はどろどろになっていた。

段々痛み以外の妙な感覚が湧きあがり、声もつられて甘くなってしまう。ぬるついた粘膜が痛みを和らげ、代わりに別の感覚を連れてくる。

「あ、あ、旦那様♡」

「少しは悦くなってきたか？」

「いやあ……♡」

悦いとまでは言えない。段々痛みは和らいでいるが。胸を掴まれ、再び乳を吸われる。

「きゅうきゅう締まった」

なぜだか嬉しそうにそう言つと、すずの口を吸う。

「舌を出すんだ」

舌を出すと、絡まりあつて、もうどうにでもなれという気持ちになつてくる。

そうこうしているうちに、佐助の動きが激しくなり、肌からも汗が噴き出している。

「やあ、激しくしないでください」

「なあに、辛いのは今日だけだ。これからはよくなる一方だ」

「いつ、あつ、ああっ♡」

「ほら、しっかり味わえよ」

「う、あ♡ああん♡」

「いい声だ。もとなげよ。お前の泣き顔は最高に刺さるな」

「ひ、あ♡あ♡んん」



「ちよつと待て」

そう言つて部屋を出た佐助が、なにかの瓶を持つてきた。

「痛みの取れる軟膏だ。塗つてやるから足を開け」

「い、いやです！」

朝日の入る部屋で辱められるのはたまらない。さすが首を振つても佐助は無視してすずの足を開いた。

明るい部屋で見せるには、あまりにふさわしくない場所を無遠慮に触られる。

油薬を恥ずかしいところに塗られて、昨夜のことを思い出す。

「怪我ではないから安心しろ。すぐに治る」

「は、はあ。もう大丈夫です。ああっ♡」

佐助の指が、出血とは関係のない突起に触れる。円を描くようにじりじりと刺激され、中から蜜ではない蜜が垂れてくる。

「ここが治ったらまたする。今日は休め」

休めと言いつつ、全然休ませてくれない。

佐助の前で全裸で足を広げて、恥ずかしいことこの上ない。

「ああっ♡」

「こっちは痛くないだろう？」

「そっつ、やあ♡ん。くりくりしないでえ」

油でてかてかに光った陰核をくりくりと刺激され、嬌声があがる。

「お前はどこもかしこも小さいからなあ。こども育てないと」

「ひう……はあ、はあ♡いやあ♡」

「中からまたすけべな汁が垂れてるぞ。お前もスキモノの素質がある」

「そ、そんなのないれす……♡は♡指止めてえ」

「俺は、恥ずかしがってる女を攻めるほうが好きでな。お前の嫌がる演技はそそるなあ」

異常な性癖を吐露しながら、佐助のねちねちとした指淫は続いた。

「え、演技ではございませ……は、んっ♡そんなにしたら♡も、無理」

「下の口はどろどろに悦んでるが？」

「あう。そんなにしたらもう……来ちゃう……」

## 四章 筆攻め

いつもどおりめちやくちやな言い分だ。しばらく唇を合わせていると、はだけた着物からすずの乳を取り出した。

佐助が口を吸いながらすずの鎖骨や首筋を筆でなぞる。

どうやら悪戯を思いついたらしいが、ただでさえ敏感なすずは筆の柔い刺激に背をのけぞらせた。

「んーっ♡ふぁ♡ふ、筆くすぐったいれす」

「周りを少し撫でているだけなのに、尖ってきたな。ここもしてほしいか？」

胸の膨らみの周りをいじっていた筆が段々中心に近づいてくる。乳首に来そうになるとまた離れていく。

「あ……ん♡」

「もどかしいか……？」

乳輪を陰陰な筆使いで撫でると、乳首が固くなるのが自分でもわかる。

「や、やあ♡」

「お前は本当に感度がいいな。いたぶりがいがあるぞ」

「ふっ、うっ」

耳の中に舌を突っ込まれながら、乳首を筆でつつかれて、すずは思わずのけぞる。

すると体を佐助に預ける形になり、うしろから抱かれながら筆で乳首を弄ばれてしまう。

「ひっ、あ……♡」

「いいから体で筆の動きを覚えろ」

「は、はひい♡」

すでに吐息も乱れ勉強どころではないが、佐助は人の悪い笑みを浮かべて、  
ずがびくびくと体を震わせるのを見ていた。

ずずの反応に気をよくしたのか、今度はお腹に文字を書いた。  
小さな臍の中を筆でつつかれ、声が漏れた。

「ひゃあん♡」

「感じてないで、ちゃんと文字を追え」

「は、はい」

「なんて書いた」

「すき」

「うむ。これは」

「おめこ？？」

「ん。次」

「あくめさせて？」

「正解」

佐助の筆が足の間を割って、すずの敏感な突起に触れた。

「あ……ひう♡ああ、そんなところに筆を……い、いけません」

「筆が濡れるな」

もう片方の手で乳首を引っ張りながら、乾いた筆がすずの割れ目を行ったり来たりするたびに、しっとりと濡れてくる。

「そ、れ、いやです。ふ、筆をそんなところにしては……」

「お前が卑猥なことばかり言ってるから」

「私は旦那様が書いた文字を言っただけで」

「なんだと？」

不機嫌そうに乳首をくりくりといじりまわし、柔らかな筆ですずの陰核の周りを刺激する。認めないとどんどん意地が悪くなりそうだ。

「わ、私が自分からねだりました」

凄まれて、すぐにすずは萎縮する。

「お前は感じやすいから。ここも興奮して膨らんでるじゃないか。根本がい



いのか？ 先端か？」

「んっ、ああ♡」

刺激で膨らんだ肉芽を佐助が筆で円を描くようになぞると、声が出てしま  
う。

右手で筆を持ち、左手でむき出しのすずの胸を揉みながら、うなじを甘噛  
みされる。

「ひっ、あああ♡」

「中心だと刺激が強すぎるのか？ 中から飛び出してゐるしな」

「ん、う、はあ、はあ♡」

「お前、本当に淫乱だな。俺のような聖人君子のところではなければ、一体ど  
うなっていたことか。悪い主人のところなら、お前は弄ばれていたに違いな  
い」

今まさに悪い主人に弄ばれている。

佐助の怖いところは、本気で言っているところである。

「紙に書いて勉強したいです」

「下の口のが正直だな。ここが興奮して赤くなっている」

ぶんぶんと首を振ると、胸をこねくりまわされ、一層肉芽を筆で擦られる。  
その弱い刺激は絶頂してしまうほどではないが、性感をじわじわと刺激する。

どんどん愛蜜が垂れてきて、着物を濡らしてしまう。

「お前ぐちゃぐちゃだぞ。勝手にいくなよ？」

佐助はそう言いながら筆の先端を中に出し入れし始めた。

「そうひくひくさせるな。筆だの張り型だので感じるとは、けしからん」  
「だ、だって」

やわい刺激に、すずの肉ビラがひくつきながら収縮しているのを佐助は惘然とした顔で見ている。中を筆の先端が何度か出たり入ったりする。

「やあ……♡中いじらないで」

「お前、筆でもいいのか。淫乱娘め」

駄目だと言われると余計に感じてしまい、すずは耐えきれずに絶頂した。

「んーっ♡は、はあ。ご、ごめんなさい……」

「お前の体は本当に淫らだなあ」

そう言つて佐助はすずを抱き上げ、布団の上に寝かせると、膝が胸にくつつくほど折り曲げて、すずの蜜をすすった。

「やあ……恥ずかしい」

「なんだ？ あくめだのおめこだの卑猥なことを平気で言う女が」

「ひ、ひどい……あぁっ♡♡」

仕置きとばかりに、きつく肉芽を舌で舐られ、すずは、唇を噛んで声を抑えた。

佐助の口淫は執拗で陰険で、ろくに物が考えられなくなる。

「いやらしい体だ。この前まで生娘だったとはとても思えぬ」  
「べ、勉強がしたいです」

「お前は、自分の気持ちを表現するのが下手だから、これも勉強だ。今どうなっているか言え」

「……………ひっ」

黙っていると、軽く歯を立てられて怖くなる。

「あ、あつ、ご主人様の舌がすずを舐めてます」

「で？」

「はあつ、変な感じがします」

「いいのか」

「ふあつ？ 中に舌いれないでえ」

「ちゃんといいと認めて、自分からねだったら許してやろう」

## 五章 睡姦

「すず。戻ったぞ」

仕事を終えた佐助が部屋に戻ると、返事がない。

見ると、布団の中ですやすやと眠っている。

文机の上にすずの書いた手紙が置いてある。相変わらず間違いだらけだが、毎日手紙を書くように言ったら忠実に守っている。

『だんなさま きょうはふかしいもおいしうできました すず』

——色気のない手紙だな。

恋心を綴るのが恥ずかしいのだろう、食い物の話題でこまかしている。佐助は、手紙を大切に引き出しにしまうと、すずを起すことにした。

「おい。起きろ。主人より先に寝るな。すずのくせに生意気だぞ」

頬をぺちぺちと叩いてもぴくりともしない。もともとすずは眠りが深く、一度眠ると火事だろうが大地震だろうが眠り続けそうなほどだった。

だから普段から最中も寝かさないようにしていた。気をやるたびにうとうとするので、激しく突いて起すことにしている。

佐助のほうも毎晩すずを抱いてすっきりしてから眠る習慣になっていたから、このままではいられない。

「はあ……手間のかかる女だな」

布団に入り、すずの体をまさぐるが、くうくうと眠ったままだ。

「まあいい。そのうち起きるだろう」

うしろから抱いて、着物の隙間から乳を揉み、耳の中に舌を突っ込んで掻きまわしていると、すずの吐息が荒くなる。

すずを初めて抱いてから一か月が経つが、恐ろしいほど感じやすい体だった。

口ではいやだいやだと言っているが、体はめちやくちや正直だった。今では挿入して、何度か突いただけですぐに達するまでになっていた。

本人もわけがわからなくなるようで、乱れると佐助にしがみついて、もつとしてほしそうな顔をする。

「まったく。鈍感なんだか敏感なんだかわからんな」



せっかく楽しみにしていたのに、ぐうすか眠るすずに苛立ち、いつもより強く揉み上げる。

豊満とはいいいがたいが、いざ抱いてみると抱き心地はいい。赤子のようにすべすべした肌に、愛くるしい童顔。

いやだいやだと泣いて、佐助の気を引くのもうまい。

——本当は俺が好きでたまらないくせに。

ちなみに佐助の仕事がうまくいっているのも、こうした根拠のない自信から来る行動力の賜物であった。

「ふあっ……♡」

乳首をつまんでくりくりといじくりまわしていると、甘ったるい声が漏れてきた。

尻でも叩いて起こしてもいいが、これはこれで面白くなってきたので続けることにした。

「ほら。お前の大好きなご主人様が触れてやってるんだ。そろそろ起きろ」

明らかに感じてはいるものの、まだ起きる気配はない。

首筋をきつく吸い上げると、印がついた。

すずはあほうだが、そこがかわいいという男もいないことはなく、目を光らせていたつもりが、先日は危ないところだった。

かわいい顔をしているが、とんでもないうつけ者だから、うっかり庶民が嫁に貰ったら大変なことになるだろう。

経済力のある佐助ならば、役には立たないすずも愛玩として置いておける。そんな佐助の気遣いも知らず、男と乳くりあっていたのだから、多少の仕置きは致し方ない。

もともと、もう少し熟したら自分のものにするつもりだったのに、いい口実も見つからず遅くなってしまった。

「ほら、お前の大好きなご主人様がお戻りだぞ」

ぐにぐにと乳の肉を両の手でこねくりまわす。小さいが触り心地がいい。いつまでも揉んでいられる。

「ん……むにゃ」

「眠っていても反応はするんだな」

乳首が固く尖り、すずの息が荒くなっている。

「すず」

すずに覆いかぶさつて乳を貪る。

やはりこれなしには、もういられない。

一見平凡な娘だが、佐助を惹きつけるなにかがあつた。他の男に渡すのは考えられない。

「気持ちいいなら起きろ」

「んっ、んー♡」

夢の中で喘いでいるが、目は開けない。

すずの着物をたくしあげて、思い切り両足を開いた。

「起きていると泣いて嫌がるからな」

以前無理やりそこを見せろと言ったら泣いていた。寝ている間にじっくり観察する。

控えめな陰唇からはすでにとろりと蜜が溢れ、ぱくりと開いて中の様子が見えた。

桃色の粘膜は濡れて光っている。

すずは幼い顔に似合わず感度がよかった。絶倫の佐助が何度挑んでも、しつかり感じて絶頂する。

それに中の具合もこの上なくよい。

いやだいやだと泣いていても、ちゃんとぎゅうぎゅう締め付けてくる。そちがすずの本心なのだろう。

「ほら。お前の好物だ」

佐助は一物を取り出すと、すずの中に一気に押し込んだ。

「はっ、お前いきなりそんなに締めるな」

眠ったままなのに、すぐの中は嬉しそうに佐助に吸いついてくる。熱く湿っていて、男根を歓迎しているようだ。

「お前が起きるまでやるぞ」

起きないはずへの仕置きも兼ねて、最初から激しく突いてやる。

顔を紅潮させ、はあはあと短い呼吸をしながらも、すずは眠ったままだった。

女共が夢中になる色男が抱いてやっているのに、起きないとは何事か。

苛立つが、眠ったままのすずを犯すことに、妙な興奮を覚え、腰を振りたくる。

「はっ、おま、いい加減起きろ。俺様がこんなにかわいがってやってるとい  
うのに」

「は……♡ん、あ♡」

くだらだらと蜜を垂らすずすの割れ目に再び舌を突っ込みながら、陰核を扱

「あつ、♡♡♡♡♡♡」

「ほら、言え。好きだ、気持ちいいと」

「んっん♡」

「涎まで垂らして、よくないなどと嘘をついても仕方ないだろう」

「あつ、♡やあつ……♡♡♡♡♡♡」

「感じると言え」

佐助の性格上、認めるまで絶対にやめない。そういう陰陰な性格なのだ。

「か、感じますう。感じますからあ」

「好きか」



「好き……れす♡あんっ♡♡」

もうなにがなんだかわからなかった。

「どうしてほしい」

「楽しんでください……ああ♡♡♡♡」

「いったのか？」

「は、はい……」めんなさい」

鬼畜なご主人様の異常な独占欲

発行者　：華月倫（かづきりん）

サークル：箱庭の楽園

（C）華月倫　2023

初出　pixiv　&ムーンライトノベルズ

mail　edenofhakoniwa@gmail.com

Twitter　@hakoniwa2552